

シリーズ 私の一冊の本

看護部 佐藤 瑠美 先生

内山 節 著

『岩波人文書セレクション 自由論—自然と人間のゆらぎの中で』

閲覧室1階 104//U25 岩波書店

本書は、哲学者による「自由」についての思索です。1995年から約1年間『信濃毎日新聞』に掲載された記事の単行本です。自由とは何か。どこから来て何を意味するのか。著者によると西洋の近代革命から生まれた言葉であるといえます。この言葉は、矛盾のない社会秩序が存在するという当時の時代の精神と結ばれており、「近代的自由」と呼ばれています。

近代的自由に懐疑する立場をとり、著者の自由論は展開されていきます。日本と西洋の歴史の比較、それから古典的思想を検討する方法で近代的自由を問っていきます。

例えば、フランス政治学者のトクヴィルが18世紀アメリカ大陸訪問で人間の「精神の習慣」を発見した有名な説に触れています。産業社会の発達によって人間は同じような精神の習慣を持つようになり、それは人間の平準化を意味します。こうなると人間は自分の生き方や心に疑いを持たなくなり、そのうえ平準化された精神と価値基準の持ち主たちが、社会の多数派を形成し、それ以外の精神の持ち主を排斥する傾向にあるという問題が示されています。

近代の要素には、市民社会の形成とともに18世紀イギリスの産業革命から始まったとされる資本制の経済の仕組みの確立が含まれています。この制度に則り戦後の日本は経済力と結びついた自由を享受することができました。ところが経済的な自由と引き換えに、時間で貨幣価値に換算することのできない非貨幣的な豊かさと労働の自由がみえなくなってきたのです。

というのも人間は知性的であります。人間はものごとを言葉でとらえ理念化する存在です。その知性ゆえに明治時代に翻訳語として「自然」が入ってきた時、人間が森羅万象をとらえることや「もののあわれ」を通して物事を認識する精神も過去のものになったと指摘しています。

これらは人間の本性による苦悩であり、だからこそ著者は日本的な自然観にヒントを得て思索を進めたように思います。昔の日本では、自由は自在という意味に近かったといえます。それは、「おのずからそうあるさま」である自然(じねん)という言葉に通じており、自在に生きることは自然な生き方と矛盾がなかったとあります。こうした検討を積み重ね、頁をめくる毎に著者の自由に関する哲学は深みを増してゆきます。

自由とは何か。本書を読み終えたなら、答えを他者に与えられることよりも問いを立てる大切さが理解でき、物事の本質を見抜く鋭さも身についてくるのがわかるでしょう。

いくつもの名著が紹介されているのも本書の魅力の一つです。古典が歴史の変化と流行に関わらず読み継がれるには理由があります。人間や社会に関する本質的な原理が書かれているからです。気になった本は原著を手に取り、本がボロボロになるまで読み込むとよいでしょう。良書を選びじっくりと読みこみ自分のものにするのは、いくつもの場面で私たちを助けてくれます。